

## 第194回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第3回通信句会) 開催

「東京五輪はどうなるか」、「新型コロナウイルス感染症は収まるか」、「変異種ウイルスの感染拡大はあるのか」、「コロナウイルス後遺症は不治なのか」、「ワクチンは確保出来るか」などなど、私たちは長い間、不安からも解放されず、早や令和3年2月もあと数日になりました。俳句サロン「道草」句会も、1月は休会になり、2月早々に、3回目の通信句会になることが通知され、今日を迎えました。

今回の通信句会に参加していただいた方々は、芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、住田幸佳さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の16名です。

通信句会の経緯を言いますと、先ずは住田先生から提示された兼題が、2月5日、奥田さんのご案内メールにて、メンバーに通告され、12日まで練りに練られた皆さんの力作が、住田先生にメールにて投句されました。ご参加いただいた上述の16名の方が、所定の選句を20日までに終え、最終的に天賞、最得多票賞(☆印)に輝いた優秀句は、次の通りです。

### 兼題1. 「早春」

◎『早春のミットに球音嵌りけり』	晶如	天1 ☆8
◎『早春やゆつくり溶ける角砂糖』	栄女	天1
◎『早春や樹皮の微熱が伝へ来る』	白然	天1
◎『早春の光りを浴びて直滑降』	一光	天1
◎『早春の空に向かつて深呼吸』	柴楽	天1
◎『早春の日差しなみなみ船溜り』	明峰	☆8

### 兼題2. 「若布」

◎『若布刈る神主襷の凜々しけり』	多佳	天1 ☆7
◎『海中の若布林に陽の射せる』	晶如	☆7

### 当季雑詠の自由題(=初春・晩冬=)

◎『円満が声に溢れて「鬼は外」』	傘吉	天3
◎『まだ頬に風のとんがる二月かな』	明峰	天1 ☆9
◎『初声を待つ産院の花椿』	和感	天1
◎『春泥に足滑らせり子が笑う』	清助	天1
◎『密やかに女集へり春ショール』	荻女	天1
◎『食べ切れぬ年となりけり年の豆』	創風	天1
◎『おぼつかぬ初音聞こえど姿なし』	一光	天1
◎『春に向け水車ゆるゆる動きをり』	白然	天1
◎『寒明や緑濃き棕櫚葉をかざし』	晶如	天1

(道人の一句)

潜り来て腰に挟むは若布なり 住田道人

兼題1. 「早春」では、晶如さんの句「早春のミットに球音嵌りけり」が、天賞一つと最得多票賞(☆印)を獲得しました。選者はミットに収まる澄んだ球音に、早春の爽快感を覚えられました。グラウンドで練習の始まるシーズン・インを、野球界では「球春始まる」と言いますが、ミットの真正面に嵌った球音こそ、「球春に嵌った」ことの象徴と思われます。次に栄女さんの句「早春やゆつくり溶ける角砂糖」が、高得票の天賞一つを獲得しました。選者が言われる「ティーカップの中で、ゆつくりと褐色に染まり、瞬時ほろりと

崩れる」角砂糖。窓の外には早春の庭が広がる至福のひとつが捉えられています。次に白然の句「早春や樹皮の微熱が伝へ来る」が、天賞一つを獲得しました。中七の「樹皮の微熱」という表現で、早春の僅かなぬくもりを掴みました。次に一光さんの句「早春の光りを浴びて直滑降」も、天賞一つを獲得しました。中七、下五の「光を浴びて直滑降」と言い切った歯切れの良さが、選者の若き日を思い起こさせたようです。きっと元気が出たことでしょう。もう一句、柴楽さんの句「早春の空に向かって深呼吸」も、天賞一つを獲得しました。選者の評に「春の訪れを喜ぶ気持ちを素直に表現された」とあります。早春の空はきっと澄み切っていたでしょう。もう一句、最多得票賞を獲得された句があります。明峰さんの句「早春の日差しなみなみ船溜り」です。中七の「日差しなみなみ」の「なみなみ」という表現が、キラキラと波打つ船溜りの情景を見事に捉えています。ベテランの一句と言えましょう。

兼題2. 「若布」では、多佳さんの句「若布刈る神主禪の凜々しけり」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。選者はご自身のお爺様が神主あられ、若布刈神事の情景を思い出しつつ、お爺様の凜々しさを思い浮かべられたのでしょうか。温かい句になりました。次に晶如さんの句「海中の若布林に陽の射せる」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。船上から見える海中の若布林、ゆらゆらと揺れる若布の影が、見えてくるような情景です。高得票を集めました。

自由題では、傘吉さんの句「円満が声に溢れて『鬼は外』」が、天賞三つを獲得しました。上五、中七の「円満が声に溢れて」に、日頃の夫婦の仲の良さが表現されており、二人で発する「鬼は外」の声のトーンまで、一致していると想像させてしまいます。見事でした。次に明峰さんの句「まだ頬に風のとんがる二月かな」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。上五の「まだ頬に」と、読者を句の中に引き込む絶妙の導入部、「風のとんがる」と、読者を句に惹きつける中間部、そして下五の「二月かな」と季語で結句しました。お見事です。もう一つ、選者の評に「冒頭の『まだ』に、春を待つ気持ちがよく表現されている」とありますが、まさにその通りですね。

次に和感さんの句「初声を待つ産院の花椿」が、天賞一つを獲得しました。選者の評として「コロナ禍の中でも新しい命は生まれる。希望を与えていただいた美しい句です」とありますが、筆者もにっこり笑って “Yes, I think so” と言います。次に清助さんの句「春泥に足滑らせり子が笑う」が、天賞一つを獲得しました。足を滑らせないと親が子を気遣っているうちに、自分の方が足を滑らせて、子に笑われる。春のぬかるみでは、よくあることでしょう。その一瞬をとらえ、選者にも共感をいただきました。さらに荻女さんの句「密やかに女集へり春ショール」が、天賞一つを獲得しました。選者の評に「不要不急でも女の集いはあるもの、マスクだけではもの足りなくて、春のショールで顔を覆いました」とあります。気持ちを密やかに、細やかに表現し、柔らかい春を表しています。

まだ続きます。次は一光さんの句「おぼつかぬ初音聞こえど姿なし」が、天賞一つを獲得しました。この句は今年最初の鶯の声に気づき、「何処だろう」と、辺りを見回しても姿は見つけることが出来ないシーン。その一瞬を切り取った作者に選者は共感し、天賞を投じました。次は創風さんの句「食べ切れぬ年となりけり年の豆」が、天賞一つを獲得しました。年の数だけ豆を食べようとしても、もう年の数までも食べ切れないのが現実です。ユーモアあふれる哀感に、選者も共感されたのでしょうか。もう一句、白然の句「春に向け水車ゆるゆる動きをり」も、天賞一つを獲得しました。ゆるゆるとした水車の動きと、なかなか来ない春の訪れとを、同一化している作者に、選者は共感して下さいました。上五は「春に向かひ」の方が、良かったでしょうか。

もう一句あります。晶如さんの句「寒明や緑濃き棕櫚葉をかざし」も、天賞一つを獲得しました。選者は寒明けのひとつ日、緑濃い棕櫚の大葉に春を感じた作者に共感し、句の持つバイタリティ溢れる勢いに一票投じられました。なお、晶如さんは、今回投句された三

句とも優秀句として選句されました。おめでとうございます。

以上の17句が、この度の通信句会に投句された48句の中から、皆さんが時間をかけて選ばれた優秀句です。「新橋ばる一ん」に集う通常のリアルな句会に比べて、時間をかけて詠まれた句が揃い、時間をかけて選ばれた句が揃っています。こうして記録をとっていても、それぞれ句が持っている訴求力と言いますか、訴えてくるものをピリピリと感じます。16名の皆さんの力作48句の句力というものでしょう。

私たちを取り巻くこの重々しい環境が、一挙に解消してしまうような安易なことにはならないでしょう。これからも通信句会は開催しなければなりませんし、皆さんとお会いできる「新橋ばる一ん」での、リアルな句会開催ということにもなるでしょう。これからも俳句という17音の短いドラマ作りを楽しみにして、沢山の俳句を読み、沢山の俳句を詠んでいきたいものです。すぐに3月はやって参ります。皆さん、これからも元気に俳句を楽しむことにしましょう。

白然（記）